

フッサールにおける発生論的現象学の構想

L'idée husserlienne de la phénoménologie génétique

中 敬 夫

NAKA Yukio

Cet essai ne consistait primitivement qu'un chapitre dans un ensemble de recherches sur "Nature et culture dans l'instant chez Bergson et Husserl", qui ont pour objet de déterminer, du point de vue développé dans nos études antérieures sur "La durée dans l'instant", le véritable contenu qu'a le "fond impersonnel" thematisé dans *Matière et Mémoire*. Dans ce but, le présent article traite des idées husserliennes de phénoménologies statique et génétique, de genèses passive et active, visant surtout à remonter à l'origine de la genèse chez Husserl.

本稿はもともと「瞬間の中の自然と文化」という、もう少し大きい論攷中の一章として構想された。我々は以前に公刊した拙稿「瞬間の中の持続——フッサールとベルクソンの調停の試み」¹の中で、フッサールの「瞬間」の内にベルクソンの「持続」を読み取る試みを行ったのだが、これまでの諸考察では、まだ幾つかの点が曖昧なまま放置されていた。第一に、ベルクソンにおける〈瞬間の中の持続〉の真の内実を求める試みにおいて、何が非脱自的内容に属し・何が脱自的内容に属するのかが、十分に区別されたとは言えない。第二に、ベルクソンの現象学的解釈を試みる我々の立場からすれば、ベルクソンの述べている「誕生以前」や「遺伝」を、そのままの形で〈瞬間の中の持続〉の内に取り込むことはできない。そしてとりわけ第三に、これはそれ以前に書いた拙稿のなかで提起した問題でもあるのだが²、『物質と記憶』の場合、物質界との直接的接触において不可分連続延長を経験するためには、我々は純粹知覚の瞬間の内に身を置かねばならなかったのだが、しかしもし現在瞬間の内に過去の全体が存続しているのであれば、知覚は再び主観化され、実在認識が危うくされるのではないか。我々としては、「知覚が知覚された対象と一致するところの非人称的な基底は留まる」というベルクソンの言葉に依拠して、この問題を解決しようという予想を立ててはいたのだが、しかしその続篇たる「瞬間の中の持続」において、この問題が十分に議論されたとは言いがたい。

そこで〈瞬間の中の持続の真の基底〉を求めるために、我々は以下の戦略を用いることにした。即ち、各々の瞬間が、実的にでも志向的にでもなしに、それまでの過去全体をいわば表情のようにして

含みながら、そのつど全体変化しつつ、まさに表情を変えてゆくというのが〈持続〉の本質であるからこそ、二度と〈同じもの〉が反復されない、というのが〈瞬間の中の持続〉の帰結の一つであった。ベルクソンにおいてもフッサールにおいても、〈同じもの〉は直接的なもの・根源的なものではなく、むしろその上に発生論的に上書きされたもの・それを覆い隠すものである。それゆえ〈同じもの〉の〈再認〉や〈一般観念〉の発生論的な成立の過程を辿ることによって、我々は〈瞬間の中の持続〉の真の実在を覆い尽くしてゆく諸表象の歴史的成立過程を、確認することができるのではないか。逆に言うなら、このような発生論的過程を逆方向に辿りつつ発生の根源へ遡行することによって、我々は表象以前にある〈瞬間の中の持続〉の真の基底実質を、確定することができるのではないか。

本稿はそのような全体構想の中、フッサールの発生論的現象学の構想を主題化するものである³。

第一節 静態論的現象学と発生論的現象学

「差し当たり形成される現象学は、単に静態論的であり、その記述は、個々の諸類型を調査して、せいぜいのところそれらを秩序づけつつ体系化する、博物学的な記述に類比的である。普遍的発生と、時間形成を超えるその普遍性におけるエゴの発生論的構造とについての問いは、まだ遠いままであり、事実またそれは高次のものである」(CM, S.110)。このように「力動的もしくは発生論的な現象学」は、「最初の“静態論的現象学”」の上に、「一層高次の段階において」(PhP, S.286) 建てられる。

発生論的現象学は、いつ、どのようにして形成されたのだろうか。最近の研究者たちの中には、例えばスタインボックのように、フッサールは現象学が判明な発生論的次元を所有していることに気づく以前から、発生論的諸分析に着手していたということを強調する者も多い(Steinbock, p.37,261. Cf. Bégout, p.47)。それゆえ極端な場合、既に『算術の哲学』の中に「発生論的モチーフ」が現前することを、わざわざ指摘する者さえいる(Kaminski, p.15. Cf. Derrida(2), p.233)。しかしスタインボックも、フッサールが「発生の概念」を「その“本来の”意味で」用いたのは1915年以降のことだと述べ、『内的時間意識の現象学講義』はまだ発生論的ではなかった、と付け加えている(Steinbock, p.40)⁴。ベグも指摘するように、「構成された所与の時間的変様」を考慮に入れるだけでは、まだ「発生論的方法論」を定義するには十分でなく、むしろ時間性が「意味の発生」として捉えられることが、肝要なのである(Bégout, p.54)。

「静態論的なものと発生論的なものの中心的区別」は、「フッサールによっては必ずしも常に鮮明に定義」されてはならず、むしろ「あまりにしばしば暗示的もしくは未開発」のままに留まっている、とベグは指摘する(Bégout, p.47)。彼によると、「静態論的分析」とは「本質的分析」であり、そこには「存在論」と「構成の現象学」という、二つの方向が含まれているのだという(Ibid., p.50. Cf. Steinbock, p.38,263)。実際『受動的総合』講義の中の或る註は、「現象学」を「(1)一般的意識諸構造の普遍的現象学」「(2)構成的現象学」「(3)発生の現象学」(APS, S.340)の三つに区分しているのだが、同講義の他の箇所を参照しても、「存在論」が「構成的目的論」(APS, S.344)と対^{セット}で用いられていることがわかる。そしてこの「存在論」、もしくは「存在論的に解釈された世界」「存在論的分析」「存在論的構造」は、「手引き」(APS, S.344; PhI3, S.615,616,617)と言われ、この文脈から

すれば、静態論的分析は与えられた存在構造の記述と、それを「手引き」ないし目的とした意識の構成作用の開明とから成る、ということになる。しかしフッサールは「静態論的現象学」それ自身を「手引きの現象学」と呼ぶこともあって (PhI2, S.41)、そのためか、「静態論的分析は発生論的分析の手引きとして機能しうる」(Steinbock, p.7) と言明する研究者もいて、両者の関係が改めて問題となる。

「静態論的」構成は、「既に“発達した”主観性に関連づけられた」構成であると、フッサールは述べている (FTL, S.257)。従って「“静態論的”考察」においては、我々は「“出来合いの (fertig)”統覚」を持つことになる (APS, S.345) — 「統覚」については後にも扱うが、ヘルトによれば、それは顕在的・非顕在的な諸射映の多を全体として超出しつつ、「対象」「同一的なもの」を主題的に把握する超越意識のことである (Held, S.10-2) —。しかるに「全ての志向的諸統一」は「志向的発生」から成り、ひとは「“出来合いの”諸統一」を「それらの構成」「それらの総体的発生」に関して問うことができる (FTL, S.216)。つまりひとは「沈殿した歴史」を「厳密な方法でそのつど露開しうる」(FTL, S.252)。この意味で我々は、フッサールが静態論的現象学を「“記述的”現象学」と、発生論的現象学を「“説明的”現象学」(APS, S.340) と呼んだことも、理解できるのである (Cf. Held, S.23)。

ところでスタインボックが「発生論的方法を静態論的方法から乖離せしめる最初の体系的な試み」(Steinbock, p.37) を見た1921年のフッサールのテキストは、「発生の諸法則」を「体験流の個々の諸生起の継起 (Aufeinanderfolge) のための諸法則」と「諸統覚の形成を規制する諸合法則性」との二つに分けて考察している (APS, S.336, Cf. Rohr-Dietschi, S.71)。同様に『形式論理学と超越論的論理学』の語る「二重の発生論的影響」とは、「想起する再生」という形式で行われるものと、「“統覚的”影響」とである (FTL, S.317)。それゆえにこそフッサールは、「私は私が以前に見出したのと同じものを今や信じ、同じものを見る」と言うだけではなく、更には「私は以前それについて知った」とも言わなければならない、と付け加えるのである (PhP, S.212)。従って、例えばウルマンのように「過去は個別的な思い出として介入するのではなく、むしろ類型的認識として介入する。それゆえ連合的影響は、一つの類型的な影響である」(Ullmann, p.214) と断じてしまうのは、我々には片手落ちのように思えるのである。

いずれにせよ、エゴはもはや「空虚な点や極」ではない。判断や価値や意志における私の「決断」は、永続的な「確信」もしくは「習性」となって存続する (CM, S.26)。更には「各々の確信変化」は、「一つの自我変化」(PhP, S.214) である。『デカルト的省察』が「同一的極」としての自我、「諸習性の基体」としての自我、「全き具体態において解されたエゴ」(「モナド」)(CM, S.102) の三つを区別したことは、よく知られていよう。「諸習性の基体」としての「自我」論とともに、我々は既に「現象学的発生の問題構制」に触れ、「発生的現象学の段階」(CM, S.103) に突入したのである。

もちろん「習性」は、「永続的な人格的自我」を形成するのみならず、「相関的」に「自我にとっての永続的な諸客観」(PhP, S.483) をも形成する。「私の自我の習性」のおかげで、対象は「その諸規定」を有するものとして「永続的に」私のものとなり、このような「永続的諸獲得物」が、「私のそ

のつどのよく知られた周界」を構成する (CM, S.102)。「歴史」とは、「根源的な意味形成ならびに意味沈殿の、相互共存と相互内在との生ける運動」(K, S.380)なのである。

「空間表象、時間表象、物表象、数表象等の心理的起源」という「古くから知られている問題」は、今や「超越論的な」問題として現れる (CM, S.110)。多くの研究者たちが強調するように (Cf. Depraz, p.197; Derrida(3), p.5, etc.), またフッサール自身も述べているように、発生論的現象学における発生とは、「超越論的発生」(CM, S.100)なのである⁵。

第二節 受動的発生と能動的発生

発生は、「受動的発生」と「能動的発生」(CM, S.111, etc.)とに区分される。前者は「自我の各々の能動的関与なき」受動的総合であり、後者は「自我 - 諸作用 (Ich-Akte)」の関与する「高次の発生」(CM, S.29)である。従って「習性」も、受動性においてと能動性においてとは、別様になる。受動性においては、それは「過去把持」ならびに「忘却」への移行であり、後者は「再生」「回想」によって再び喚起される。「自我能動性」においては、例えば私が昨日初めて行った決断を今反復するなら、それは私の判断決心のAktualisierung [現実化・能動化]なのである (APS, S.360)。

ところで、「以前の能動性の内に起源をもつ」が、「今はそれ自身受動的に現れたもの」であるような受動性がある。『受動的総合』講義はそれを、「第二次感性」と呼ぶ。「あらゆる習性的なものは、受動性に属す。それゆえ習性的になった能動的なものもまた [そうである]」(APS, S.342)。「あらゆる能動的に構成されたもの」は背景に沈み、「受動性」へと転ずるのだが、それでもそれは「その起源の刻印」を有している。それに対し、「根源的受動性」というものもあって、フッサールは「能動的自我の関与なき構成的能作」には「感性」、自我が同定の能動性 [活動] ^{アクトイグニテート} によって自己自身に与えた諸対象の構成的能作」には「悟性」という、古典的な名称を与えている (AS, S.40-1)。

能動的発生は受動的発生より「高次」と言われたが、しかし「受動性」は「自体において第一のもの」であり、「あらゆる能動性」は「受動性という低層」を「前提」(AS, S.3)する。「能動性としての能動性一般は、それ自身能動性によって発源するのではないその“前提”を、その可能性の条件をもつ⁶」のであり、「受動性の発生」こそが「最初の基づける発生」(PhP, S.286)なのである。

(a) 受動的発生

能動的発生から区別された受動的発生は、更に「時間意識」と「連合」とに区分される⁷。「発生の原法則は根源的時間意識の法則であり、再生の、それから連合ならびに連合的予期の原法則である。それに加えて我々は、能動的動機づけに基づく発生をもつ」(APS, S.344)。「連合的発生という現象」は「内的時間意識の諸総合の上に階段状に積み重ねられた」受動的先所与性であり (EU, S.77. Cf. S.207)、「連合の現象学」は「根源的時間構成論の高次の継続」(APS, S.118)なのである。

まず時間意識の方から見てゆこう。「原発生 (形相的形式としての)、内在的なヒュレー的諸対象の構成の形式は、各々の更なる発生にとっての基礎であり、あらゆる発生は時間構成的意識の原形式の中で遂行される」(BMZ, S.282)と、既に1917/8年のベルナウ草稿は述べている。「他の全ての発生がそこへと返し関連づけられるところの志向的発生の普遍的な本質形式」は、「内在的時間性の構成

のそれ」(FTL, S.318)であり、「時間」は「あらゆる自我論的発生の普遍的形式」(CM, S.109)なのである。そして「時間流の原発生」においては「過去把持」が「発生論的原法則性」の第一の側面であり、「未来予示」がその「第二の側面」(APS, S.73)と言われる。なぜなら「記憶意識」の或る内容や形式は、「将来に対する或る動機づけの力」(BMZ, S.377)をもっているからである。ちなみに「時間構成意識の本質合法則性(形相的構造)」は、「意識発生」のみならず、「諸対象性の根源的構成としての発生」の、「それ自体において第一の、最も深い合法則性」(BMZ, S.281)でもある。

次に「連合」。連合は、「それなくしてはエゴとしてのエゴが考えられないような、一つの生得的アプリアリ」(CM, S.29)とさえ言われる。連合は「一つの超越論的・現象学的根本概念」(CM, S.113-4)なのであって、ベグは「連合の現象学的意味の“突破”」が「現象学の発生論的転回」と全く同時であることに着目しつつ、「発生論的かつ超越論的な現象学的観点」を明るみに出したことが、「フッサールの思索を連合原理のポジティブな再発見へと誘う主たる事実」(Bégout, p.132)であったろうと推測する。連合は、「意識一般に永続的に属する<内在的発生の形式にして合法則性>」(APS, S.117. Cf. APS, S.283; EU, S.78)なのである。

ところでホーレンシュタインの研究以来、連合に「通常の意味での連合」(回想、現在記憶、将来予期等々)と「生ける現在の印象的圏域の内部でのアフェクティブまた前アフェクティブな諸統一の融合」という、「二つの大きなグループ」を区別する見方が有力である⁸。事実フッサールは、例えば『経験と判断』の或る箇所、「何か¹が何か²を想起させる³」「或るものが他のものを指示する」という現象と、「或る領野から引き立つ(sich herausheben)ものとしての個々の際立ち(Abgehobenheiten)、個々の所与性」とを、等しく「連合」の枠内で扱っているし(EU, S.78)、連合を以下の三段階に、即ち「生ける現在の対象的構造を可能化する、体系的かつ体系化するアフェクティブな喚起」(「第一段階」)、「暗くなった空虚な表象を再び判明化する逆放射的な喚起」(「第二段階」)、「このような喚起された空虚表象の、再生的直観への移行」(「第三段階」)という三つの段階に区分する『受動的綜合』(APS, S.180-1)も、後二者を「通常の意味での」連合内部における二つの過程とみなしうるなら、先の二大別を確証する。「所与」は既にして感性的に「媒介」(Kaminski, p.47-8)されているのであり、「ヒュレー」は「自己自身を連合的に構成する」(Ullmann, p.150)なのである。

双方の連合に共通とみなされる「類似性」⁹を採り上げてみることにしよう。「類似性綜合」は「受動的に構成される」(AS, S.68)とフッサールは言う。しかしベルクソンにも似て、彼は「結局のところ一方で全ての諸形態、他方で[全ての]諸色彩は類似する」(APS, S.132)ことを認めている。連合は「連関なく与えられたものをも結合しうる結合方式」(AS, S.76)であり、ベグもまた「広義ニハ(lato sensu)連合は[……]“綜合一般”以外の何ものでもない」(Bégout, p.137)と述べている。

「連合」の第一の、「通常」ならざる意味の方を、もう少し詳しく見ておくことにしよう。「随分遅くになって連合の探究への通路を見出した現象学によって、この[連合という]概念は、一つの全く新しい相貌を、新しい根本諸形式を伴った一つの本質的に新しい区画づけを得、そこには例えば、共存と継起とにおける感性的布置(Konfiguration)が属している」(CM, S.114)と『デカルト的省察』は言い、「事実ひとは連合の概念を現象学的に拡張しなければならず、現在の意識と記憶的に沈んだ

意識との結合としての連合についてのみならず、一つの現在意識の内部での類比的な諸結合についても語らなければならないだろう」(APS, S.272)と『受動的綜合』は述べている。なぜなら既にして「受動的先与性の領野」たる「感官領野」は、「単なるカオス」ではなく、「特定の構造をもった、際立ちと分節された諸個物をもった領野」(EU, S.74-5)だからである。例えば「白い背景の上の赤い諸斑点」というような最も単純なケースを考えてみても、そこには際立ちとコントラスト、「等質性」と「異質性」の構造が見出される(EU, S.76)。しかるに「等質性と異質性」は、「連合的統一化の二つの異なる根本方式の結果」(EU, S.79)なのである。「感官領野の統一性は、それゆえ、連合的融合(等質的連合)によって初めて統一性である。[...] 類似のものは類似のものによって喚起され、類似しないものへのコントラストの内に入る」(Ibid.)¹⁰。領野内での際立ちも、やはり「連合的綜合の産物」(Ibid.)なのである。

「類似性」が増すとき、それは「全き融合への傾向」(APS, S.195)を孕むが、しかし「領野の等質性」は「一つの理想化」(APS, S.148)に過ぎない。ところで、「周域から引き立つこと」は、「触発すること(Affizieren)」(EU, S.24)と呼ばれる。「背景の受動性からアフェクション[触発]が自我に向かい、それは[自我の]指向(Zuwendung)の前提である」(AS, S.4)。アフェクションは「受動的能動」にさえ「先立つ」(APS, S.84)のである。しかしフッサールは、一方で「アフェクションは何よりもまず際立たせ(Abhebung)を前提としている」(APS, S.149)と言っておきながら、他方では「アフェクティブな力のおかげでのみ、そもそも結合が成立した」(APS, S.175)とも述べている。領野の構造化は アフェクション 触 発 を前提し、 アフェクション 触 発 は領野の構造性を想定する——そこに見出されるのは、ベグも指摘する「受動性の悪循環(circus vitiosus)」(Bégout, p.189)である。ベグ自身はこの困難を、「アフェクティブな本能」(Bégout, p.198)というフッサールの考えに基づいて解決できると考えているようなのだが、この問題は第三節に回し、先に「能動的発生」の方を見ておくことにしよう。

(b) 能動的発生

「以前の能動的生の多様な諸獲得物は、死せる沈殿物ではない。不断に共に意識されてはいるが、目下のところ取るに足りず、全く注目されないままに留まる背景(例えば知覚領野の)でさえ、その暗黙の妥当に従って、共に機能しているのである」(K, S.152)とフッサールは述べている。ただし「諸作用」からは「諸獲得物」のみならず、自我の側でも「能力の創設」(PhI3, S.619)が立ち現れ、前者は例えば「カテゴリー的能動性[活動]」において「永続的獲得物」(FTL, S.320)をもたらし、後者は例えば「作用諸決断」が「人格的諸習性」を「根源的に創設」(PhP, S.490)する。

ところで各々のAktus[作用・能動]は、「原創設的作用であるか、それとも単に反復する作用であるか」(APS, S.360)のどちらかである。「経験」は、初めてのものとみなされるなら、「対象的意味」の「原創設」¹¹となって、爾後の経験の反復の際に影響を及ぼす。「あらゆるよく知られたもの」は「根源的なKennenlernen[初めて知ること]」を「指示」(CM, S.113)するのであって、例えば「知覚」も「知識」を獲得することによって、「いつでも使える所有物(Besitz)」(APS, S.10)になる。

「原創設」と特に関わりが深いのが、「統覚」の問題構制である。『デカルト的省察』は、以下のよ

うに述べている。「統覚は推論ではなく、思惟作用ではない。各々の統覚は[...]類似の意味をもった或る対象がそこにおいて初回的に構成されたところの一つの^原創設を、志向的に指示し返す。この世界の我々によく知られていない諸事物もまた、一般的に語るなら、それらの類型に従ってよく知られている。我々は、まさしくここにあるこの物ではなくても、このようなものを以前既に見たことがあるのである。[...]既に物を見る幼児は、何か初回的に^{はさみ} 鋏の目的意味を理解し、今から幼児は、直ちに最初の一瞥で、鋏を鋏として見る。しかしもちろん、明示的な再生、比較においてではなく、推論の遂行においてではない」(CM, S.141)。

「統覚」とは、「何か個体的なもの」を意識する意識、「知覚の内に実的に含まれていない」ものを意識する意識(APS, S.337)であり、その意味で「内在的内容」を「超越する」(APS, S.336)意識である。例えば我々が「鋏」を見るとき、鋏の一面に接するだけで、裏面を見なくても、我々はそれを特定の対象意味を具えた一箇の個体として統覚することができる。「Aという体験の出現は、Bという体験の出現を動機づける」のであって、この意味で「統覚」それ自身が、「動機づけ」であるとさえ言われる(APS, S.337)¹²。

統覚は「一つの歴史」(APS, S.338-9)をもつ。ただし「意識のこの“歴史”(全ての可能的諸統覚の歴史)」は、「事實的諸統覚」の「事實的発生」に関わるのではない。「諸統覚の各々の形態」は「一つの本質形態」であり、それは「本質諸法則に従ったその発生」を有しているのである(APS, S.339)。特に「類型」から「特殊諸類型」(EU, S.399)が分かれ出るというようにして、「統覚から統覚が必然的に成立する」(APS, S.338)という事情がある。つまり「原初的なあり方をした統覚的諸志向」たる「原統覚」から、「様々な類型性をもった具体的諸統覚」が生じてくるのであって、この意味で発生の流れは、単なる「相互継起(Nacheinander)」ではなく、「相互起因(Auseinander)」(APS, S.339)と言われる¹³。

このようにして「統覚」は、「類型」と関わりが深い。「経験の全ての諸対象が初めから類型的によく知られたものとして経験されるということは、その根拠を、全ての諸統覚の沈殿と、連合的喚起に基づくそれらの習性的継続作用との内にもつ」(EU, S.385)。「初回的に構成された対象」とともに「新しい対象類型」が「永続的に予描」(EU, S.35)されるのであって、かくして対象は、「親密さという性格」(EU, S.125)を、即ち「類型的親密性」(EU, S.382)を獲得する。「類型的に統握された各々の物」は、更には「類型の一般概念」へと我々を導くこともある(EU, S.399)。例えば「花」という概念が一度形成されたならば、新たに登場した花は、「かつて創設された“花”としての“花”の類型の連合的喚起」に基づいて「再認」(EU, S.395)される¹⁴。

「類型」の形成には、フッサールが「説明(Explikation)」¹⁵と呼ぶ過程も関与している(Cf. EU, S.139-40,143)。説明とは、「基体」としてのSが「諸規定」 α, β, γ を獲得して、 $S\alpha\beta\gamma$ として規定されてゆく過程のことであり(Cf. AS, S.22-4)、「知覚関心の方向が対象の内的地平の内に入ってゆくこと」(EU, S.115)、まさしくその意味での解-明-展-開(Ex-plikation)である。そして「説明において際立たせられた諸特性」が「メルクマル」となることによって、対象はしかじかの特定の「類型」の対象として、識別されるようになるのである(EU, S.138-9)。

「述定」は「解明」を「前提」(EU, S.240)する。「前・述・定・的・経・験」が「述・定・的・判・断」の「根・源」(EU, S.21)であること、もしくは「述・定・的・明・証」が「経・験」と呼ばれる「非・述・定・的・明・証」に「発・生・論・的・に・連・れ・戻・さ・れ・る・こ・と」(FTL, S.217)については¹⁸、それは『経・験・と・判・断』や『形・式・論・理・学・と・超・越・論・的・論・理・学』の周知のテーマの一つなので、ここではもはや詳述しないが、例えば「否・定」や「判・断・の・諸・様・相」も、「前・述・定・的・経・験」に基づくものとされている (Cf. EU, S.97,99)。そして「述・定・的・判・断」の方はたとえば、それは「永・続・的・結・果」(EU, S.250)を、即ち「永・続・的・な・認・識・所・有・物」(EU, S.64-5)を、もたらしてくれるのである。

かくして「同・じ・の・物」を「再・認」(EU, S.64)するのは、自我の能動的な働きだということになる。「受・動・的・に・先・与・さ・れ・た・同・一・性・統・一」は、まだ「そ・れ・と・し・て・把・捉・さ・れ・保・持・さ・れ・た・対・象・的・同・一・性」(EU, S.60)ではなく、「根・源・的・受・動・性・の・境・域」では、ひとはまだ「本・来・的・意・味」では「諸・対・象」については語りえない (EU, S.81)。「全・き・本・来・的・意・味・お・け・る・“・対・象”」は、「同・定・す・る・活・動」[能・動・性] (AS, S.25)によって根源的に構成されるのであり、「対・象・化」は常に、「自・我・の・能・動・的・一・能・作」(EU, S.64)なのである。

同様にして「全・て・の・普・遍・性」は「自・発・的・能・動・性・の・形・成・物」(APS, S.291)であり、「普・遍・の・理・念・性」を「あ・ら・ゆ・る・主・観・的・な・も・の・に・無・関・連・な・即・自・存・在」のように記述する「プ・ラ・ト・ン・化・す・る・言・い・回・し」(EU, S.397)は、この観点から非難される。むしろ「普・遍・の・存・在」は、「産・出・す・る・自・発・性・の・過・程」において「構・成・さ・れ・た・存・在」(Ibid.)なのである。

第三節 発生の根源への問い

ソコロフスキーは、フッサールの「静・態・論・的」諸分析は「た・っ・た・十・歳・の・人・物・の・意・識・お・い・て・実・現・さ・れ・た・も・の・と・し・て・の・“・父”」というノエマと「六・十・歳・の・と・き・に・同・じ・人・物・に・よ・っ・て・構・成・さ・れ・た・も・の・と・し・て・の・ノ・エ・マ」とを区別しないと指摘した後で、こう付け加えている。「歴・史・性・の・次・元・が・不・在・で・あ・る・。・そ・れ・は・フ・ッ・サ・ー・ル・の・発・生・論・的・構・成・論・お・い・て・説・明・さ・れ・る・こ・と・に・な・る・次・元・で・あ・る」(Sokolowski, p.162)。しかし我々としては、逆に幼児期のノエマは大人のノエマと同一ではなかった筈だと述べることによって、発生の始源へと問いを返すこともできるのである。「現・象・学・の・イ・ニ・シ・ア・テ・ィ・ヴ・は・、・絶・対・的・な・る・根・源・的・な・も・の・の・先・在・性・を・消・し・去・り・は・し・な・い・が・、・際・限・な・く・、・従・っ・て・手・の・施・し・よ・う・も・な・く・、・現・象・学・を・そ・の・根・源・的・な・も・の・か・ら・遠・ざ・け・て・し・ま・う・。・な・ぜ・な・ら・現・象・学・は・、・相・続・さ・れ・た・象・徴・的・諸・形・成・の・沈・殿・に・貢・献・し・た・全・て・の・諸・先・入・見・、・諸・前・提・、・諸・傾・向・等・を・担・う・、・既・に・構・成・さ・れ・た・時・間・に・お・い・て・始・ま・る・か・ら・で・あ・る」(Kaminski, p.84)とカミンスキーは述べている。若きデリダによれば、「構・成・さ・れ・た・も・の」つまり「派・生・し・た・産・物」から出発して、「構・成・す・る・源・泉」即ち「最・も・根・源・的・な・契・機」に遡らなければならないという点に、「発・生・の・全・問・題」(Derrida³, p.2)が存しているのである。

発生の始源として差し当たり考えられるのは、自我の「誕・生」である。「各・々・の・自・我・主・観・は・そ・れ・固・有・の・歴・史・性・を・も・ち・、・そ・の・際・そ・の・“・誕・生”」をもつ (PhI3, S.618)。『危・機』では「誕・生・と・死・と・の・諸・問・題」は「世・代・・出・生・性 (Generativität) の諸問題」「超・越・論・的・歴・史・性・の・諸・問・題」「性・の・問・題」等と並置されているのだが (K, S.191-2)、『デ・カ・ル・ト・的・省・察』によれば、「誕・生・お・よ・び・死・と・動・物・性・の・世・代・連・関・と・に

ついで「世代的・出生的諸問題」は、「発生論的諸問題」の中でも、「下位圏域」の解釈的作業を前提する「高次の次元」(CM, S.169)に属するのだという。

この点で、「世代的・出生性 (generativity)」の諸問題を「発生論的」諸問題から区別して、「静態論的」「発生論的」「世代的・出生的」の三つの現象学を区分するように提唱したのが、スタインボックである。彼によると、フッサールの“generativity”には「生成 (becoming) の過程」という意味での「出生 (generation)」と、「諸世代 (generations)”を超えて生ずる過程」という、二つの意味が含まれていて、「世代的・出生的現象学 (generative phenomenology)」は、規範的・相互主観的・地質学的・歴史的等の諸問題を扱う。「発生論的現象学」はまだ「個人の発達」「個人的生の発達」しか扱わず、「内的時間・意識」の枠に拘束されている。だが、なるほどフッサール自身は現象学の或る次元を「世代的・出生的」なものとして明示的に定式化こそしなかったとはいえ、しかし「世代的・出生的諸問題」——誕生と死、故郷世界と異他的世界等のような——は、発生論的諸分析のコンテキストの中で、既に採り上げられているのだという (Steinbock, p.3-4,36,189,257,261-2)¹⁷。

フッサール自身はといえば、彼は例えば『現象学的心理学』講義の中で、共同体における他我的「追理解」や「追創設」について語りつつ、「純粋に理性動機からの」決断・確信と「“盲目的”動機からの」決断・確信の二つを、或いはもう少し細分して「示唆された [だけの] 確信」「能動的賛同の確信」「固有の理性からの賛同の確信」の三つを区別している。第三の確信においては、私は「他者によって自由に動機づけられた、追創設における確信の主体」になるのだという (PhP, S.212-4)。

だが我々は、少し回り道をし過ぎたかもしれない。共同体や世代的・出生性の問題は、「他者」や「歴史」への問いを巻き込んで、膨大な問題群を提起することになるだろうが、本節の目的はそれではない。本節はむしろ、発生の根源へと遡行しなければならないのであった。フッサールは述べる。「全き発生とは、人間ならびに人類の発生であり、またそれらにとっての世界の発生である。前者の発生 (erste Genesis)¹⁸ においては、人間幼児性以前に存する全てのことは、問われないままである」(PhI3, S.619)。我々のベルクソン解釈とも関わるのだが、誕生以前の事柄は、誕生以後の自我主観にとっての事柄でなければ、客観的な出来事となって、そのような扱いが現象学的方法の可能性そのものを脅かさないかということは、少なくとも問題にはなりえよう。ともかくも我々はフッサールの指示に従って、誕生以前は不問に付し、とりあえず〈幼児期〉¹⁹の問題から着手することにしよう。

前節でも見たように、「既に物を見る幼児」は、例えば「缺の目的意味」を初めて理解することによって、缺を缺として見ることを学んでゆく (CM, S.141)。「心の発達」の中で「統覚的体系」を構成することによって、幼児は彼の「世界表象」を構築してゆかねばならない——「客観的に考察するならば、幼児は世界に到達する」(CM, S.168)のである。それどころか、そもそも「物」を見ることさえ、初期学習の成果であると言わねばならない。「我々は幼児期初期に、物一般を見ることを初めて学ばなければならなかった」(CM, S.112)。ましてや「理念的諸対象」は、まだ「我々の幼児期」には属していないのである (CM, S.111-2)。

しかし発生の〈根源〉とは、単にクロノロジカルな意味での〈根源〉(起源)のことだけだろうか。「単なる物 (例えばそれをハンマーとして、テーブルとして、美的産物として知らしめるような全て

の精神的諸性格は度外視して)は、「能動的把捉とともに始まる精神的諸活動 [能動性]」より「先に与えられる」(CM, S.112)と述べられているが、このことは、〈基づけ〉上の共時的先後関係において、あらゆる瞬間にいつでも起こりうることではないだろうか。「受動的直観において先与された物」は、「解明の活動 [能動性]」によっていかほど変様されようとも、「この活動 [能動性]」の間にも、その中でも立ち止まる先所与性 (Ibid.) なのである。そして「諸客観の原歴史」は、「ヒュレーの客観」へと連れ戻す (APS, S.345)。「内在的ヒュレー的諸対象の構成の形式」は「各々の更なる発生にとっての基礎」(BMZ, S.282)なのだし、「精神的諸活動 [能動性]」がその「総合的諸能作」を遂行している間、「それに全ての素材 (Materie) を提供している受動的総合」は、「どんどん進行中」(CM, S.112)である。そしてもし「受動的総合」の形成が「一部はあらゆる能動性に先立ち、一部はあらゆる能動性をそれ自身再び包括する形成」(CM, S.113)であるとするなら、ヒュレーそれ自身は、ヘルトも言うように、「いつでも意識において生起しうる」「原素材 (Urmaterial)」(Held, S.15,16)とみなしうるのではないだろうか。

このような考えに対する最も強固な反論は、アグィーレにおいて見出される。彼はフッサールの言葉に基づいて、「感覚」もまたその「歴史」をもつと主張するのである (Aguirre, S.161. Cf. S.166,179-80)。「我々が諸事物を表象するということ、しかも一瞥で諸事物を見るということ[...]」、そのことは、志向的発生論的分析においては、以前の原創設的な発生において物経験という類型が成立したということ、そしてそれとともに物というカテゴリーが我々にとってその初回の意味において既に創設されているということ、を、遡行的に指し示している。しかしそのことは[...]本質的に、最広義における各々の対象カテゴリーについて、“内在的”感覚与件のそれについてさえ妥当する」(FTL, S.317)。だが、例えば「黒」という「意味」が成立するためには、その意味発生の原創設の歴史が必要であったという程度のことなら、そのことを認めるに我々としてもやぶさかではないけれども、しかしアグィーレのように「黒」という意味が全く私に知られていなければ、いかにして私は何かを黒として感覚しうるというのか (Aguirre, S.160) とか、「純粹受動的に“白を白と”連合する自我の可能性は、ここでもまた一つの“原創設”へと遡行的に指し示す」(Ibid, S.161)とまで言うのは、少し言い過ぎという気がする。

そこで、「最下位の発生論的段階」に立ち返ることにしよう。それはいかなる「統覚」も含まない「印象的現在」(APS, S.150)の世界である。あらゆる「馴染み性質 (Bekanntheitsqualitäten)」も「親密性」もない、「対象」と言えるものさえない「受動的先所与性の領野」は、しかし、先に見たように「単なるカオス」ではない (EU, S.74-5)。前節(a)でも見たように、「前 - アフェクティヴかつアフェクティヴな受動性の循環」の解決を「アフェクティヴな本能」の内に求めたベグは、フッサールが「根源的で本能的なアフェクション」の問題を十分展開していないと非難しているのだが (Bégout, p.198)、同じく「本能」を「原アフェクション」とみなすロール＝ディーチ (Rohr-Dietschi, S.114) は、フッサールの以下の言葉を引用している。「構成的始源の自我は、空虚な自我 - 極ではなく、アフェクションの始源は、全く未規定なのではない。その自我は、既に本能 - アフェクションである[...]。そしてそのようにして、最初の周界の構成もまたそれとともに規制されている。」²⁰

「本能 - アフェクション」によってのみ規制されている始源的世界とは、いかなるものであろうか。ところでフッサールは、「最下位の発生論的段階についての我々の考察」には、「抽象」という作業が「必要」(APS, S.150)だと述べている。始源的なもの、根源的なものへの遡行のために必要な抽象の努力、我々はそれを、ベルクソンにおいても見ることになるだろう。

註

¹ 『愛知県立芸術大学紀要』No.26-7、1997-8。

² 『物質と記憶』に於ける緊張 (tension) と伸張 (extension)」、『愛知県立芸術大学紀要』No.25、1996。

³ 本稿で利用したフッサールの第一次文献に関しては、[] 内に示されている以下の略号を用いる。

E. Husserl, *Cartesiansche Meditationen und Pariser Vorträge*, *Husserliana*, Bd. I, Haag, Martinus Nijhoff, 1973. [CM]

—*Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, *Husserliana*, Bd. VI, Haag, Martinus Nijhoff, 1976. [K]

—*Phänomenologische Psychologie*, *Husserliana*, Bd. IX, Haag, Martinus Nijhoff, 1968. [PhP]

—*Analysen zur passiven Synthesis*, *Husserliana*, Bd. XI, Haag, Martinus Nijhoff, 1966. [APS]

—*Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*, Zweiter Teil : 1921-1928, *Husserliana*, Bd. XIV, Haag, Martinus Nijhoff, 1973. [Phi 2]

—*Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*, Dritter Teil : 1929-1935, *Husserliana*, Bd. XV, Haag, Martinus Nijhoff, 1973. [Phi 3]

—*Formale und transzendente Logik*, *Husserliana*, Bd. XVII, Haag, Martinus Nijhoff, 1974. [FTL]

—*Aktive Synthesen : Aus der Vorlesung "Transzendente Logik" (1920/21)*, *Husserliana*, Bd. XXXI, Dordrecht/Boston/London, Kluwer Academic Publishers, 2000. [AS]

—*Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein (1917/18)*, *Husserliana*, Bd. XXXIII, Dordrecht/Boston/London, Kluwer Academic Publishers, 2001. [BMZ]

—*Erfahrung und Urteil. Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, Hamburg, Felix Meiner, 1972. [EU]

第二次文献に関しては著者名で示す。同一著者に複数の文献があるときは、(1)(2)…で区別する。

A. Aguirre, *Genetische Phänomenologie und Reduktion. Zur Letztbegründung der Wissenschaft aus der radikalen Skepsis im Denken E. Husserls*, Haag, Martinus Nijhoff, 1970.

B. Bégout, *La généalogie de la logique. Husserl, l'antéprédicatif et le catégorial*, Paris, Vrin, 2000.

N. Depraz, "La logique génétique husserlienne, quelle « logo-phanie »?", in J.-F. Courtine (dir.), *Phénoménologie et logique*, Paris, P. U. F., 1996.

J. Derrida, *Introduction à « L'origine de la géométrie »*, Paris, P. U. F., 1995¹ (1962¹). (1)

—"« Genèse et structure » et la phénoménologie", in *L'écriture et la différence*, Paris, Éditions du Seuil, 1967. (2)

—*Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, Paris, P. U. F., 1990. (3)

K. Held, "Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie", in *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, hg. von U. Claesges u. K. Held, Haag, Martinus Nijhoff, 1972.

R. Kaminski, *Genèse du logique dans la phénoménologie transcendantale de Husserl*, Paris, L'Harmattan, 2003.

D. Lohmar, "La genèse du jugement antéprédicatif dans les *Recherches logiques* et dans *Expérience et jugement*", in J.-F. Courtine (dir.), *Phénoménologie et logique*, Paris, P. U. F., 1996.

U. Rohr-Dietschi, *Zur Genese des Selbstbewusstseins. Eine Studie über den Beitrag des phänomenologischen Denkens zur Frage der Entwicklung des Selbstbewusstseins*, Berlin / New York, De Gruyter, 1974.

- R. Sokolowski, *The Formation of Husserl's Concept of Constitution*, Hague, Martinus Nijhoff, 1970.
- A. J. Steinbock, *Home and Beyond. Generative Phenomenology after Husserl*, Evanston / Illinois, Northwestern U. P., 1995.
- T. Ullmann, *La genèse du sens. Signification et expérience dans la phénoménologie génétique de Husserl*, Paris, L'Harmattan, 2002.
- ⁴ 若きデリダもまた、『内的時間意識の現象学講義』の中で記述された時間性を「固定された」ものとみなしているが、彼はフッサールの「発生論の説明全体」が、「静態論の本質」をもった「構成」によって「構成されたもの」の領分にしか適用されておらず、批判する (Cf. Derrida(3), p.37, 117, 202, 236)。ちなみに最近の研究者の中で、独自の観点からデリダと同じような結論を出したのが、ユルマン (Ullmann, p.159-60, 174) である。
- ⁵ 「フッサールは[...]論理主義の構造主義と心理主義の発生論との二つの暗礁の間を切り抜かねばならなかった」(Derrida(2), p.235) とデリダは述べ、ベグもまた「静態論的な超越論的なもの」と「経験的な発生論的なもの」との「超出」について語りつつ、「超越論的なものの発生」はそれ自身において「超越論的」であることを強調する (Bégout, p.118)。同じことをドゥブラツは、別の観点から、タム上「事実性 (facticité)」と「実事性 (factualité)」を区別しつつ、「単なる偶然的な実事性、本質的な事実性への変貌」(Depraz, p.216) という言葉で言い表している。
- ⁶ Husserl, Ms. Transc. C 2 1, Bl.7, zitiert in Rohr-Dietschi, S.37.
- ⁷ それゆえ我々は、「受動的なものと連合的なものとのこの等価は、発生現象学全体の一特徴であり続けるだろう」(Bégout, p.145) というベグの考えには、賛成できない。
- ⁸ E. Holenstein, *Phänomenologie der Assoziation. Zu Struktur und Funktion eines Grundprinzips der passiven Genesis bei E. Husserl*, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1972, S.32 [今回我々は直接参照しえなかった], cité in Bégout, p.142. Cf. Bégout, p.99 ; Ullmann, p.87-8.
- ⁹ 「あらゆる直接的連合は、類似性による連合である」(EU, S.78)。
- ¹⁰ 「連合はそれゆえ、常に一つの差異化である」(Ullmann, p.86)。
- ¹¹ 「経験は、その対象の意味をもった諸対象が我々に - とって - 有ることの、原創設である」(FTL, S.173)。「各々の対象ないし各々の対象のあり方にとって、常に一つの時間的に原創設する発生があり、一つの初回の経験があり、当該の歴史もしくは伝統の一つの始源がある」(Aguirre, S.159)。
- ¹² 我々は「統覚」を「能動的発生」の問題構制の中で扱っているが、フッサール自身の叙述からは、それが能動性に属するのかわりに受動性に属するのかわりに、判然としない。「動機づけ」を「能動的発生」との連関の中で扱っているテキストもあれば (APS, S.343)、「自我の各々の能動的関与なき統覚」(CM, S.29) について語っているテキストもある。
- ¹³ 「彼 [フッサール] が発生論的分析を行うとき、彼はいかにしてこの、もしくはあの特殊の意味が以前の諸意味から生じたのかを、説明しようとする」(Sokolowski, p.198)。
- ¹⁴ ユルマンは「類型」は「受動的な仕様で」生まれ、「一般概念」は「能動的形成」に依拠すると考えているが (Ullmann, p.222)、類型統覚の形成が自我の一切の能動的関与なしに行われうるのか、我々は疑問に思う。
- ¹⁵ 「解明」に関しても、それが能動的なものなのか受動的なものなのか、俄に判然とはしない。ロール＝ディーチは——ヘルトの解釈に基づいて——「解明的総合」を「受動性の発生」の枠内で扱っているが (Rohr-Dietschi, S.69)、しかしフッサール自身は「解明の能動性 [活動]」(CM, S.112) について語ったり、「解明の過程」においては対象は、「受動性」の内へと沈んでさえ、「当該の諸規定によって規定されたもの」として構成され続け、「諸作用」において根源的に構成された「意味諸形成」を「習性的な知」(AS, S.23) として受け取っているのだと述べたりしている。
- ¹⁶ 最近の研究者の中には、「前 - 述定的経験」の問題構制が既に『論理学研究』の内に見出されることを強調する者も多い。Cf. Lohmar, p.234 ; Bégout, p.260. なお、ベグは「述定的総合」を「諸作用の圏内での、前述定的総合の単なる“反復”」(Bégout, p.300) とみなし、ローマルもまた——むしろ「再び実効化」されなければならないという意味を込めてではあるが——「解明の過程」の「反復」(Lohmar, p.237) について語っているのだが、ユルマンは、このような「前述定的水準と述定的水準の同形性」という「フッサールの先入見」は、「正当化 - されない - 一つの仮説」(Ullmann, p.145) に過ぎないと批判して、独自の理論を展開しようとしている。

- ¹⁷ 立場も観点も異なるが、ユルマンは「沈殿」に「個人的思い出の形式での経験の沈殿」「類型的沈殿」「伝統的沈殿」の三つを区別し (Ullmann, p.244-7)、更に別の観点から、デリダはフッサールの「発生論的記述」の内に「論理学的な道」「自我論的な道」「歴史的 - 目的論的な道」の「三つの方向」を認めている (Derrida(2), p.246-7)。ちなみにデリダによれば、意識が過去の意義や価値や作用を「習性」や「諸沈殿物」の形で保存するのは、「生き生きとした意識の過去把持的力能」が「有限」だからであり、「文化のコミュニケーション的世界の中での伝統的沈殿の機能」とは、「個人的意識の過去把持的有限性を超出すること」 (Derrida(1), p.45) だという。
- ¹⁸ スタインボックは“erste Genesis”を「第一の発生」と読み、「第一の」発生を超えるのが「世代・出生性」だと主張するのだが (Steinbock, p.36, 189, 275)、しかし前後の文脈から言って、ここは「前者の発生」と読むべきと思われる。
- ¹⁹ フッサールは「1931/2年頃の幾つかの手稿」の中で「幼児期最初期における自我の発生」についての問いを立てたとのことだが (Rohr-Dietschi, S.101)、ロール＝ディーチによるその研究 (*Ibid.*, S.101-32) に関しては、我々も以下で利用することにする。
- ²⁰ Husserl, Ms. transcr. BIII3, Bl.16, zitiert in Rohr-Dietschi, S.115.